



2014年2月28日

独立行政法人建築研究所国際地震工学センター

第106号

〒305-0802 茨城県つくば市立原1 TEL 029-879-0678 FAX 029-864-6777

今月の話題

- 広島・神戸研修旅行
- グローバル研修旅行研修生レポート
- 国際地震工学研修・普及会議、東京で開催
- GRIPS 集中講義参加研修生レポート
- ジェネラルミーティングと国際親善パーティの開催
- 訃報
- 2014-15 研修生募集まもなく開始
- 強震観測 ～50年の蓄積～ 建築研究所

広島・神戸研修旅行 -グローバル地震観測コース-

国際地震工学センター 管理室長 飯場 自子、上席研究員 芝崎 文一郎

グローバル地震観測コース研修生は、2月6日(木)～8日(土)、広島と神戸を訪問しました。



外務省での講義

6日朝は、外務省にて、軍縮不拡散・科学部軍備管理軍縮課 小野健首席事務官による講義「核軍縮における日本の立場」を受講しました。講義終了後研修生は新幹線で広島に向かいました。

翌朝は広島平和記念資料館を視察し世界平和を持続することの重要性を学びました。午後は神戸に向かい、人と

防災未来センター防災未来館を見学し阪神淡路大震災からの教訓を学びました。

最終日は、明石海峡大橋と野島断層記念館(北淡震災記念公園)訪問を予定していましたが、あいにくの大雪でした。明石海峡大橋と高速道路が遮断し、新幹線も遅れが目立ち始めたため土曜日の予定を全てキャンセルしました。幸い午前中の新幹線に乗ることができ、夕方までにはつくばに帰着することができました。



広島平和記念公園にて

研修 データベース

IISEENET (地震防災技術情報ネット)

IISEE-UNESCO レクチャーノート

Eラーニング

シノプシス・データベース (修士論文概要)

Bulletin データベース

地震データベース

2011年3月11日東北地方太平洋沖地震

地震情報

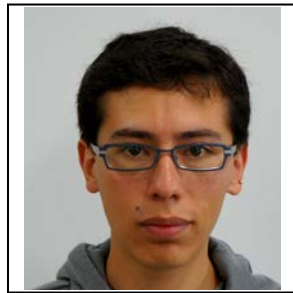
宇津カタログ (世界の地震被害)

地震カタログ (世界の大地震の震源メカニズム、余震分布等)

グローバル研修旅行研修生レポート

(1)ゴンザロ アントニオ フェルナンデス マラニョン (ポリビア)

資料館に入り、「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命を奪います。」というフレーズを読んだとき、何がこの資料館に展示されているのか、米国が原爆を広島に投下する決断をどうやって下したのか、そしてどのように夏の晴天が米軍のその恐ろしい計画実行を手助けしてしまったのかということ想像しました。



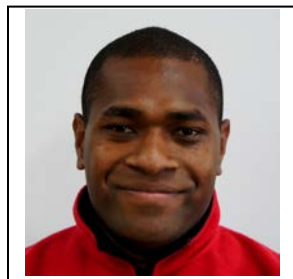
ただ資料館を歩き回り、数人の被爆者の方たちの証言を聞いただけで、爆弾投下の衝撃のみでなく「被曝後の影響」を生み出したという、歴史上もっとも悲しい日となってしまったその日にいるように感じ始めました。黒い雨が降り、あちこちで火事が起こり、人々はほとんど残っていないわずかな力を振り絞ってお互いを助けようと思いました。また、多くの生存者も放射線被爆により病気となってしまいました。その他にも、まだまだ悲しい歴史があります。

しかし、日本の人々は、謙虚な姿勢で努力をし、禎子さんのお話のようにお互いを助け合い、平和的姿勢で民衆を統率してきました。そして、理由もなく殺された人々を我々に思い出させるその美しい四角形の建物を建てました。このようななかで、日本の人々は、この残忍な計画を企てた人々を許すことができたのです。

第二の広島・長崎を防ぐために、CTBT を締結したすべての国がその条約を批准して発効させるべき理由が、ここにあるのです。日本国旗に昇る太陽が掲げられているように、広島と長崎は、人類には今何ができるのか否かを物語る資料館とともに、再び世界にとって重要な都市となったのです。

(2)インケリ ワイセガ デュワイ (フィジー)

平和記念資料館を訪れたことで、私は、米軍が原爆投下の際に、原爆の効果が正確に観測できるように直径3マイル以上の都市部のある都市を投下目標としたことを知りました。広島は、その市内に連合軍の捕虜収容所がないことから、投下目標に選ばれたのです。



世界初の、原子爆弾という非常に殺傷力のある武器により、人々が何も知らず突然に生命を奪われたことは、不幸なことと言わざるを得ません。

今回の研修旅行は非常に驚くべきもので、目から鱗が落ちるような体験でした。私が以前に得たほとんどの情報は、多くはメディア報道、人との会話、演説などからの間接的な情報でした。しかし、実際の目で見ると感情がわき

上がってくるからです。まるで、1945年までずっと遡り、原爆投下のその現場に立ち合っているかのようでした。

この原爆による人々の苦痛を目にしたことは、私にとって忘れがたい経験となりました。この資料館から汲み取るべき教訓は、原子力を有するすべての国が、進んで原子力の破壊目的用途を自制し、互いに歩み寄って CTBT の一員となることでしょう。それが、よりより世界と将来世代のためになるのです。

論文募集

IISEE Bulletinは、現在地震学、地震工学、津波に関する論文を募集しております。開発途上国に関するものを対象としていますが、それに限らず募集しています。

送って頂いた未発表の論文は、編集委員会と専門家による査読を行います。投稿料は無料です。

是非チャレンジして下さい。

(3)インディラ シワコチ (ネパール)

私は、広島があんなに自然豊かな都市であろうとは想像していませんでしたし、現在のとても発展した広島を見ることができてとても嬉しく思います。

路面電車を降りると、まず目に入る「広島原爆ドーム」が当時の破壊を物語ります。その建物の状態を見ることで、我々は「原子爆弾」により影響を受けた土地周辺の人々の状況を想像することができました。



資料館では、溶けた岩、屋根瓦、そして武器等といった、実際に熱や放射線で破壊された物が収集されており、また、体から剥がれ落ちる皮膚などを再現した模型人形などもありました。なぜ、日本に原爆を投下することに合意した国々は、人々の苦痛の瞬間に思い至らなかったのでしょうか。人は誰でもエゴを持っているものですが、殺戮や破壊は、将来世代にとって唯一の解決策ではありません。

広島を訪れた人は誰でも、世界から核兵器をなくさなければならないと感じ、結論づけることができるでしょう。そうでなければ、日本で起こったような小規模な出来事だけでは済まず、全世界を破壊するような事が起きてしまうでしょう。

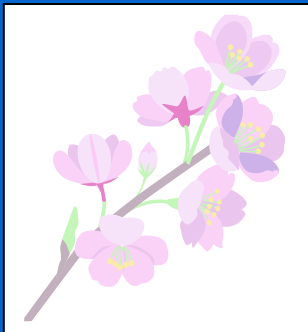
最後に、私は、人々に広島を訪れて次のようなメッセージを感じて欲しいと思います。もし、各国が警告を無視して敵を作り続けていては、昨日の日本の人々が感じた核兵器の脅威、そして今日より破壊力を持つ武器製造が、明日の「先カンブリア時代」(生物のいない世界)に繋がるのだということ。

国際地震工学研修・普及会議、東京で開催

国際地震工学研修・普及会議が、2月26日、東京の四谷で開催されました。同会議は、研修の計画と実施、更に地震学及び地震工学に関する知識及び技術の普及に関し、有識者の皆様からご助言・ご提言を頂くことを目的に設置されています。

会議の委員は、18名の大学教授及び名誉教授、関係機関の幹部職員、著名なジャーナリストの皆様によって構成されています。独立行政法人防災科学技術研究所の岡田義光理事長に会長をお願いしています。当日は代理出席者の方を含め13名の委員の方がご出席下さいました。

委員の皆様方のご協力・ご支援に対し IISEE 一同厚く御礼申し上げます。



国際地震工学研修・普及会議

GRIPS集中講義参加研修生レポート

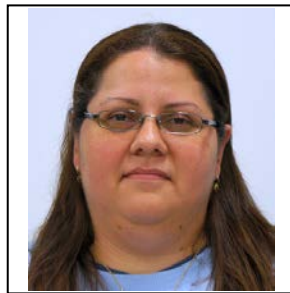
地震学及び地震工学コース研修生と津波防災コース研修生は、1月27日から2月7日まで政策研究大学院大学(GRIPS)で集中講義を受けました。これは修士課程プログラムカリキュラムの一つです。



楽しむのは今です。

(1)ラクエル ノエミ バスクエーズ スタンスク (ベネズエラ、地震学コース)

日本は、洪水・土石流・地滑り・地震・津波などの深刻な自然災害の多い国です。自然の脅威と直面してきたその長い歴史から、日本国民を守るためには、災害に対する脆弱性を軽減するための徹底的な対策とリスク管理を導入することが必要不可欠でした。



そして、災害リスク管理の分野において、日本はより多くの経験を積んだ国の一つとなりました。

GRIPSでの滞在において、我々は、防災政策、災害軽減・復興政策について学びました。そのなかで、災害リスク管理の基礎や、災害因子・自然災害・環境問題の識別・分析、災害リスクの傾向、資産保護対策、そして防災政策などの非常に重要なテーマについて勉強しました。

ベネズエラに戻った際には、兵庫県南部地震(1995年)や東北地方太平洋沖地震・津波(2011年)から学んだ教訓が、母国にリスク軽減対策を導入するために大きく役立つことと期待しています。

(2)エンダード ハク (バングラデシュ、地震工学コース)

防災政策プログラムの異なるコースから、3名の博士課程学生を含む計35名がGRIPSの講義に2週間参加しました。今回、我々は、2コースを受講し、また、名古屋市へ、そして東京都の六本木ヒルズ森タワーへと、2回の研修旅行に行きました。



防災 コースは安藤教授が担当され、政策復興コースは森地教授が担当されました。我々は、お二人から多くを学ぶことができました。

特に、森地教授は素晴らしく、日本での防災政策に関連する分野において豊富な経験をお持ちで、氏の興味深い個人的経験から、政策事例について逐一ご説明くださいました。

また、研修旅行はどちらもとても興味深いものでした。名古屋市では、名古屋城、上野城、敦田神宮、リニア・鉄道館を訪れました。また、忍者屋敷に立ち寄り、忍者ショーも観覧しました。敵から自己を守るための忍者の罠、戦術、からくり、仕掛け、そして武器は、比類のない驚くべきものでした。東京都では、都市開発に関し54回建ての六本木ヒルズ森タワーを訪れ、所有者がどのようにこのビルをメンテナンスし、また、どのように自己発電をしているのかを見学しました。

連絡先

IISEE ニュースレターは、IISEEと卒業生の架け橋を目指しています。

ニュースレターへの報告や記事をお待ちしております。皆様の自国でのご活躍をお知らせ下さい。

また、皆様の同僚やお友達もこのメーリングリストに登録するようにお誘い下さい。

iiseenews@kenken.go.jp
http://iisee.kenken.go.jp

ジェネラルミーティングと国際親善パーティの開催



ジェネラルミーティング

2月18日にジェネラルミーティングを開催しました。ジェネラルミーティングは、研修生と職員が忌憚のない意見交換を行う場として設けられています。本研修コースにとっては2回目の開催になります。同日昼休みには、建築研究所食堂で国際親善パーティが開催されました。E.N.氏を始めとするスタッフが(低予算で)豪華な料理を準備しました。

地震学及び地震工学コース研修生、津波防災コース研修生、グローバル地震観測コース研修生、IISEE スタッフ、そして、スペシャルゲストとして理事長、理事が参加されました。

グローバル地震観測コース研修生にとっては、IISEE での最初の、そして最後のパーティになります。短い時間でしたが、楽しく過ごしました。



国際親善パーティ

訃報: Prof. Angel San Bartolome (ペルー)

2014年2月11日にペルーカトリカ大学教授エンジェル・サン・バルトロメ氏の訃報が届きました。友人であるルシア・カサベルデ・デ・スズキ氏(1980—1981年地震工学コース元研修生)が知らせてくれました。

バルトロメ氏は、1974—1975年地震工学コースの研修生でした。氏からの投稿で、氏のブログをニュースレター第100号で取り上げました。ご家族と同僚の皆様にご心からお悔やみ申し上げます。

2014-15 研修生募集まもなく開始

JICA より、まもなく2014-15コースの募集要項が対象国に対して発送されます。インド、エルサルバドル、タイ、トルコ、ニカラグア、ネパール、バングラデシュ、フィリピン、ペルー、ミャンマー、モンゴルが地震学・地震工学コースの対象国です。そして、インドネシア、チリ、ニカラグア、フィリピン、ペルー、ミャンマーが津波防災コースの対象国です。詳細については、自国のJICA事務所にお尋ねください。

バックナンバーは
下記をご覧ください。

<http://iisee.kenken.go.jp/nldb/>



強震観測 ～50年の蓄積～ 建築研究所

建築研究所は1957年以来、主に建物を対象とした強震観測を行っています。これまでの半世紀の間には、数多くの強震記録が蓄積され、耐震設計技術の向上のための技術開発に利用されてきました。

詳細は <http://smo.kenken.go.jp/ja> をご覧下さい。

* 研究担当者: 国際地震工学センター主任研究員 鹿嶋 俊英

概要

建物の耐震安全性の向上のためには、地震動の特性と地震時の建物の挙動を理解する必要があります。建築研究所では実際の地震時の建物の挙動を調査するために、強震観測と関連する研究を行っています。強震計は、全国の主要な都市の建物に設置し、現在、74の観測地点が稼働しています。観測地点のうち約1/3が東京を中心とする関東地域にあります。全ての観測地点にはデジタル式の高性能な強震計が設置され、ほとんどの地点が記録の迅速な回収や保守作業のため、電話回線で建築研究所と結ばれています。建物の動的な挙動の解明が観測の目的であり、基本的にセンサーが建物の頂部と基礎に設置しています。また、地盤と建物の相互作用を知るため、近傍の地盤にもセンサーが置かれる場合があります。

建築研究所の強震観測網はこれまでに多くの貴重な強震記録を採取してきました。この中には、1964年新潟地震の川岸町アパートの記録や、1978年宮城県沖地震の東北大の記録など、歴史的な記録が含まれています。新潟地震の記録は、被害地震の強震記録としては日本で最初のものと言えます。また宮城県沖地震の東北大の記録は、建物の9階で1Gを超える加速度が得られ、建物の耐震設計法を検証する上で貴重なものでした。その後も1993年釧路沖地震の釧路地方気象台の記録、1994年三陸はるか沖地震の八戸市庁舎の記録など確実に成果を挙げています。

